

エマヌイル・カザケーヴィチの戦争小説

——戦後の「大祖国戦争」へのまなざし——

佐藤 亮太郎

1 はじめに

本論では Э.カザケーヴィチの作品『星 (Звезда)』(1947) を取り上げる。¹ 「大祖国戦争」後に発表された作品で、スターリン賞を授与され、一般に知名度が高い作品² から、作品に描かれる女性像を分析する。作品において、男性と女性キャラクターの担う役割、そして作品全体におけるその意味を検討することによって、「大祖国戦争」の文学が内包している男性／女性の価値判断やイメージを考察する手がかりとしたい。

2 大祖国戦争と女性

1941-1945 年の「大祖国戦争」では数多くの女性が国家の戦争遂行のために協力し、軍需生産のみならず前線においても活動した。前線で活動していた女性兵士だけでも 80 万人を超え、彼女らの多くは献身的に働き、優れた兵士となった。

「大祖国戦争」での女性の貢献を概述した В.ムルマンツェヴァによると、³ 女性は、銃後での工業、農業、サービス部門等で、男性に代わる労働力を発揮した他、軍のほとんどの兵科、兵種に存在していた。特に通信、対空、戦車、狙撃兵、交通部隊、洗濯部隊、空軍飛行隊等の赤軍各部隊には女性兵士が少なからず配置されていた。医療分野には特に女性が多数在籍し、またドイツ軍占領地におけるパルチザン活動においても多数の女性が参加していた。同時代の総力戦体制下の西欧諸国の産業部門での女性の関与以上に、「大祖国戦争」におけるソ連邦の女性の、銃前・銃後における関与は際立っている。

¹ 以下、本論で使用するテキストは以下のものを使用した。

Э. Казакевич. Повести. Весна на Одере. М.: Художественная литература, 1974.

² 小説に基づいて二度、映画化されている。1949 年版は監督 А. Иванов、2002 年版は監督 Н. Лебедев。

³ В.С. Мурманцева. Советские женщины в Великой Отечественной войне 1941-1945. Военно-исторический журнал. №2(1968). С.47-54.

В.С. Мурманцева. Ратны и трудовой подвиг советских женщин. Военно-исторический журнал. №5(1985). С.73-81.

法律では、1939年8月の第四回臨時最高会議で制定された兵役法で、第一章で男子全員に兵役義務を課している他、第一章第十三条で、軍医、獣医、その他特別な技術を持つ女性を軍務に招集する権限を国防及び海軍人民委員に与えている。⁴ 特別な技能を持つ女性の軍への招集は法的に認められていたが、実際に戦争が勃発すると、膨大な数の女性が軍への志願を求めて軍事委員会に殺到した。⁵

この現実を反映して戦争における女性の活躍は、文学作品に題材を提供し、様々な形で戦争に参加する女性像が文学作品の中に登場した。

Xenia Gasiorowska の *Women in Soviet Fiction 1917-1964*⁶ は、ソビエト文学に登場する女性人物の広範な考察しており、彼女によれば、第二次世界大戦を題材としたソビエト小説の中では、女性は主に、戦争で苦しめられる犠牲者、産業部門での労働者、看護婦あるいは医師、女性兵士、女性スパイという形で頻りに登場している。

「大祖国戦争」をテーマとした作家は圧倒的に男性作家によるものが多い。そして実際の歴史の中で数多くの女性が女性兵士として参加したという事実と平行して、創作である戦争小説にも女性の登場人物が欠かせない要素となっている。女性兵士像を見ることによって、「大祖国戦争文学」を今日的に捉える補助線を設けることはできないか、男性作家による男性兵士が中心な物語を捉える際の「媒介」として「女性兵士」を捉えることはできないか、というのが筆者のねらいである。

膨大な数の散文の形で表現された戦時における女性の姿、そして女性兵士にまつわるイメージは、当然ながら多様なものであるが、出発点として本論ではカザケーヴィチの『星(Звезда)』を材料として、戦争小説での女性登場人物の役割を考察する。

⁴ 蘇聯邦年鑑(1942年版)、昭和17年、日蘇通信社。以下は該当部分。ここではカタカナ、旧漢字を修正。

第一章 総則

第一条 一般兵役の義務は法律なり。

労働赤軍に於ける兵役は「ソ」連邦人民の名誉の義務なり(憲法第百三十二条)

第二条 祖国の防衛は「ソ」連邦人民の神聖なる義務なり、謀逆、宣誓違反、敵軍投降、国防軍に対する危害、間諜行為は最も重大なる罪悪として法の峻厳を以て処罰す(憲法第百三十三条)

第三条 「ソ」連邦人民たる総て男子は人種、民族、信教、教育、地位出生の別なく「ソ」連邦国防軍に於て軍務に服すべきものとす

第十三条 国防及海軍人民委員は医師獣医及特種技能の教養ある女子を陸軍及海軍に登録して且服務せしめ又は教育召集を為す権限を有す。

戦時に於て前項の資格を有する女子は陸海軍に於て特種及補助の勤務に服せしむるため召集することを得。

⁵ 当時の女性の戦争への貢献、とりわけ前線任務に就きたいという願望の強さ、そのための執拗な努力の実例は、*C. Алексиевич. У войны не женское лицо. 1985.*の中で頻りに出している。

⁶ X. Gasiorowska, *Women in Soviet Fiction 1917-1964*, Madison: University of Wisconsin Press, 1968.

3 エマヌイル・カザケーヴィチ

エマヌイル・ゲンリホヴィチ・カザケーヴィチ Э.Г. Казакевич (1913-1962) は、ポルタヴァ県クレメンチューク生まれ。技術学校卒業後、1931年から1938年まで極東のユダヤ自治州ビロビジャンでコルホーズ議長、ジャーナリスト、劇場支配人と多岐の分野で活動し、戦争前にイディッシュ語による詩、およびそのロシア語訳、幾つかのシナリオを発表していた。1938年にモスクワに移り、1941年の独ソ戦開始時には軍隊に志願し、モスクワ近郊での戦闘に従事。その後、予備部隊勤務を経て偵察隊長補佐として終戦を迎えた。『星 (Звезда)』は、1947年、『ズナーミヤ』誌に発表され、⁷ 翌年には1947年度スターリン賞散文部門 2 等賞を獲得した。ロシア語での創作で作者に幅広い名声をもたらしたのは、『星』が最初のものである。戦時中には作者自身が偵察隊の隊員として活動したこともあって、『ステップの二人 (Двое в степи)』(1948)、再びスターリン賞を受賞した『オーデルの春 (Весна на Оudere)』(1949)、『友の心 (Сердце друга)』(1953) と戦争を題材とした中・長編を継続して描き続けた。1954年にはソ連作家同盟理事会メンバーに選出された。彼は創作の他、雑誌編集に意欲的で1956年からは「リテラトゥールナヤ・モスクワ」の編集員として活動した。上述の戦争小説の他に、レーニンを題材とした『青いノート (Синяя тетрадь)』(1961)、『敵 (Враги)』(1961) を発表。戯曲、旅行記、連作集など様々な作品構想を暖めていたにもかかわらず病状の悪化により死去した。

4 作品の内容

『星』の物語は11の章と結末から成り、ソ連軍による攻勢の停滞中に、独軍後方に侵入し、有益な情報を味方に伝達した後に壊滅する偵察部隊の活動を描いている。時期は大戦後半、ソ連とポーランドとの国境付近まで独軍を追撃してきた師団の偵察隊員が主な登場人物となる。以下にあらすじを簡単にまとめる。

- (1) 独軍を追うソ連軍の攻勢が勢いを失くし、師団は森の中に入り込んでしまう。師団長セルビチェンコは路上を歩いてゆくトラフキン上級中尉率いる偵察隊を激励する。偵察隊は農家の馬を徴発し小川の対岸にある独軍陣地を偵察する。戦況の大きな変化がないまま師団は長期滞在の準備をするとともに偵察隊を独軍後方に送る (第1-3章)。
- (2) 先行したマルチェンコ率いる偵察隊は戻ってこない。トラフキンと通信兵カーチャが出会い、カーチャに愛が芽生える。先述の馬の徴発をめぐって検察官がやってくる。偵察隊は再度の偵察行のための訓練に励む。入院していた古参偵察隊員アニカーノフの帰隊。トラフキン隊は「ズヴェズダ」、連絡本部は「ゼムリヤ」と命名され

⁷ 初出は Знамя. 1947. №1. С.11-66.

- る。その際、カーチャの偵察行への志願は却下される（第 4-6 章）。
- (3) トラフキン隊の出発（トラフキン、ブラジニコフ、マモチキン、グループ、セミョーノフ、ブイコフ、アニカーノフの七人）。偵察隊は森の中に集中する新手の独軍部隊、駅からの輸送を行うトラック部隊を発見する。二度、捕虜を捕まえ情報を集め、「ゼムリャ」との交信を行なう。駅舎に向かった別働隊のうち、グループが負傷する（第 7-9 章）。
- (4) ソ連軍偵察隊の情報を掴んだ独軍情報部は、偵察隊狩りを組織する。SS「ヴィーキング」師団長ゲルベルト・ギッレ中將は、軍上層部への昇進を狡猾に画策しつつ、トラフキン隊の搜索を命じる。納屋に隠れていたトラフキン達は、独軍搜索隊に発見され、命からがら森の中へと逃走する（第 10 章）。
- (5) 三度目にして最後の「ズヴェズダ」からの通信で独軍部隊の陣容がソ連軍上級司令部に通報される。戦争という機械が再び動き出し、師団は慌ただしく対抗準備を整える。偵察隊の帰還に備える「ゼムリャ」の連絡本部で、カーチャはトラフキンの帰還を願い、ラジオの傍から離れず一人、交信を試みる。結局、トラフキン隊は行方不明のままである。1944 年の夏、師団長セルビチェンコはポーランドの道中で部下の偵察隊を激励するが、戻らなかった偵察隊のことが思い出され言葉に詰まる（第 11 章・結末）。

5 トラフキン上級中尉——「生」と「死」の狭間にある存在

主人公トラフキン上級中尉は、師団偵察隊の隊長であり、「いつもドイツ軍のことを考えていて、他の事は何も考えない！いつも独軍防衛線の変化を描いていて、地図の上に座り、前線を一日中歩き回る…」と部下から敬われている。師団長セルビチェンコからの覚えもめでたい。トラフキンは極めて模範的な指揮官であるが、彼の率いる偵察隊員は、他の兵士と比べてある程度の行動の自由を享受する代わりに、不断の死の危険に危険に直面することを求められる。トラフキンは単なる模範的指揮官ではなく、その任務ゆえの特性を身に帯びている。トラフキン隊が独軍後方に出発する場面では、そのことが以下のように語られる。

迷彩服を着て、くるぶしや腹、あごの下や後頭部の紐を全て締めると、偵察隊員は俗世の些事から自由になる。偵察隊員はもうすでに自分自身にも、自分の上官にも自分の思い出にも属していない。隊員は手榴弾とナイフをベルトに結びつけ、懐にピストルを入れる。このようにして隊員は人間の定めのと絶縁し、自分を法の外に置いて、ただ自分だけを頼みとするのである。隊員は自分の身分証、手紙、写真、勲章やメダルを曹長に、党員証かコムソモール手帳を党オルグに返却する。このようにして隊員は、何もかもを自分の心だけにしまって、過去と未来と絶縁するのである。

隊員は森の鳥のように名前を持たない。隊員は、同志たちへの信号の伝達には鳥の囀りを真似るだけとし、明確な話し方をやめる。隊員は野原、森、溪谷と一体となり、その空間の精霊となる。危険で、待ち伏せを行い、頭の奥底で自

分の任務だけを考え続ける精霊になるのである[斜体は原文に拠る]。

こうして古来からの遊びが始まる。その遊びでは登場するのは二人だけ。人間と死。(C.46、第7章)

危険極まりない任務に赴く時、偵察隊員はもはや生きた人間ではなくなり、死の世界に半ば足を踏み入れた存在となる。そして同時に、個々人を特定できるあらゆる記号を取り外し、「野原、森、溪谷と一体」となる。人間としての、個としての存在から、瞬時に自然と溶け込むことの出来る存在として「森の精 (Леший)」、「緑の幽霊、幻 (Зеленые призраки)」、「Grüne Gespenster)」、「精霊 (Дух)」と偵察隊は繰り返し例えられている。そして偵察隊員として長く活動しているトラフキンはすでに「生」と「死」の両方の世界の狭間で生きることを身に付けている。トラフキンをはじめとして偵察隊員は「生」と「死」の狭間の存在なのである。

6 女性兵士カーチャ

女性兵士カーチャ・シマコーヴァは、主人公トラフキン中尉と淡い恋愛感情を交わす。彼女はつい最近部隊に到着したばかりで、若くて「明るい髪のも静かな、美しい瞳」を持つ通信兵である。トラフキンの部下マモチキン軍曹と知り合ったカーチャは、酒宴に呼ばれた偵察隊のいる納屋で、疲れきって眠り、寝言で帰還しなかった戦友を呼んでいるトラフキンに一目ぼれする。

カーチャは足音を忍ばせてトラフキンに近づくと彼の上で立ち止まった。彼の目は、寝ている子供のように、半分開いており、色あせたゴムナスチョルカはボタンを外してあり、辛い悔しさで表情がこわばっていた。彼女は静かに言った。

「なんていい男なの」。

「彼を起こすな！」。マモチキンは、乱暴に言ったが、カーチャは彼の言葉に、眠っている者に対するやさしさを感じて、気を悪くすることもなく、そのやさしさにとらわれてしまった。

「安心してください。我らが中尉殿」。マモチキンが無愛想に言った。

パーティーは結局おじゃんになってしまった。みなが感じた。

ただカーチャだけが、何だか高尚な、悲しくも荘厳な感情のまま、納屋から出て行った。緑色の森を歩きながら、不安にとらわれた彼女は、また幾分か驚いてこの感情を感じていた。何が彼女をこんなにもかき立て、感傷的にし、喜ばしい物悲しさで一杯にするのか？彼女の目の前には、ほとんど子供とっていいくらいの中尉の顔があった。もしかしたら彼女は、彼の顔の中に自分自身の反映、彼女の心の奥深くに隠された、何か痛みに似たもの、小さな町の生まれの娘のいまだ静まらない痛み、戦争の中の厳しい生活で、過酷な現れをした痛みを驚いたのかもしれない。(C.27-28、第4章)

まだ、ほんの若者であるのに過酷な戦場での生活を送らねばならない自分自身の心情を、トラフキンの表情の中に見て取ったカーチャは、偵察隊の宿営している納屋に足しげく通

うようになる。カーチャは他の偵察隊員たちとも親しくなり、部下たちは堅物のトラフキンとカーチャの仲を取り持とうとするが、彼は彼女の愛に気が付かない。カーチャはこれまで経験した戦場生活での習慣とは異なる気持ちが生まれたのを自覚する。

カーチャに関して言えば、彼女は初めはトラフキンの閉鎖性と若者らしい内気さに自信を失った。いや、このような関係に彼女は慣れていなかった。彼女は常に愛されるのになれていた。このささやかな成功の原因が、彼女の長所では全くなく、むしろここには男性が多く、女性は数えるほどであるからということを知っていたけれども。

その後で彼女はひととき自分が幸せだと感じた。彼女の恋人は普通の人ではなく、厳しく、誇り高く、潔癖だった。彼はこんな風でなければいけなかった。自分自身の臆病さに驚きつつも、彼女は彼と同席するといつになく怯えた。彼女は自分を、経験のあるかわいい罪作りと考えていたのだろうか？年が近いことによる親近感なのか、それとも単なる退屈からなのか。行軍生活の大騒ぎの中で軽く口付けや抱擁を受けたり返したりすること、それを彼女は生活と名づけていたのであった！（C.29、第4章）

これまで彼女が経験してきた戦場生活では出会わなかった「普通の人ではない」人物。

トラフキンは、カーチャにとって戦場での自分の存在を見つめ直すきっかけとなる。「彼女は常に愛されるのになれていた。… [中略] …むしろここには男性が多く、女性は数えるほどであるからということを知っていたけれども」という、女性であることがそれだけで価値を持つ存在として、最初に女性兵士カーチャは作品に登場する。このような女性兵士との男性の関係は、師団長セルビエンコがとる女性兵士に対しての態度でも明確にされている。彼は保護者としての態度を取り、彼女らを守り、不快な目にあわないように何かと気を配っている。

セルビエンコ大佐は、保護者のような優しさをもって女性に接した。心の中では彼は、戦争には女性のいるべき場所はないと考えていた。しかし、彼は女性に対して軽蔑していたのではなく、多くの他の人と同じく、戦争の重みを熟知している古兵のあわれみで彼女たちをあわれんでいたものであった。（C.24、第3章）

カーチャは作品内では、特別に「保護」されるべき存在であり、師団長セルビエンコは、「戦争を熟知している古兵のあわれみ」をもって彼女を保護する。「戦争には女性のいるべき場所はない」と考える故に。

しかしカーチャは、トラフキンに一目惚れすることで、ただ女性である存在から抜け出し、カーチャはトラフキンに体現されている「厳しく、誇り高く、潔癖」な資質を希求するという心理的变化を遂げる。

しかし、作品では戦争は男性の仕事として行われ、女性はそこから排除される。それは、以下のトラフキンがカーチャの愛に気がつき、カーチャが彼とともに危険な偵察行に同行を志願する場面で行なわれる。

7 トラフキンとカーチャの恋愛の意味

偵察に先行したマルチェンコ隊が行方不明になってから、部下の訓練に励むトラフキンは、前線の兵士たちは、入れ替わりが激しく、個人的な付き合いがないままに忘れ去られていくことをトラフキンは考える。

時には兵士たちは死んだ者たちを懐かしがることもできなかった。付き合いは全く短いもので、その人の性格は分からないままだった。この軍服の下にはどのような心が脈打っていたのか？この若い額の下では何が考えられていたのか？

およそ一年の間、偵察隊員とともにいたトラフキンは自分のはるかに年をとってしまったように感じていた。自分がすでに多くのことをこなしてきたことを意識するのは彼には快かった。もし彼が死んだら、兵士たちは悲しむだろうし、師団長でさえ追悼してくれるだろう。「そしてあの娘」。彼は突然思った。「あのカーチャも」。(C.38、第5章)

この場面でトラフキンがカーチャの愛の存在を自覚する。彼がカーチャからの愛のみならず、自分の中にある彼女への愛を見出したことは重要である。それは厳密には愛情ではないかもしれない。だがトラフキンは行方不明となったマルチェンコ隊に続いて、前線への偵察行に行くことを知っている。偵察隊の出発を目前に控えている時、自分が死ぬことを覚悟し、自分を悲しんで覚えていてくれる存在としてカーチャを思い浮かべる。

このとき、カーチャはトラフキンにとって、自分の死後、「自分の存在を想起してくれるであろう存在」となった。トラフキンにとってカーチャは、部下の偵察隊員と違って、自分の生と死を共にするべき存在ではなく、「生」の側に留め置くべきものとなったのである。第六章でカーチャの愛に気付いたトラフキンはカーチャの偵察隊への志願を拒否し、安全な後方に残しておいたのは、まさにその理由によるものである。

トラフキン隊の出発の直前、偵察隊と連絡本部とのコールサインについての打ち合わせの際、通信隊長リハチョフはトラフキンに尋ねる。

「それでも、連れて行く通信兵を選ぶのだろうか？我が隊には優秀な兵士がいて、偵察隊を志願している。今日だって——彼はちょっとまごついて笑った——シマコーヴァ伍長の上申書を受け取ったのだ。彼女は君と行きたがっている」。

トラフキンは顔をしかめて言った。

「何を言うのです。同志少佐。通信兵は必要ありません。散歩に行くのではないのです」。

自分の熱心な頼みに対するこのような侮辱的な拒絶を耳にしたカーチャは、納屋から走り出た。トラフキンの蔑むような言葉に彼女は深く傷ついた。

「なんてがさつで、悪い人なんだろう！」。「彼女がトラフキンのことを考えると腹立ちがこみ上げてきた。あんな人を愛するのは馬鹿だけだ……」。(C.42、第6章)

カーチャの偵察行への志願はトラフキンにすげなく拒絶される。トラフキン隊の出発す

から見送れなかったカーチャはその後、無線機による通信でトラフキンとの接触を継続する。トラフキン隊「ズヴェズダ」と本部「ゼムリャ」の二回目の交信で、以下のような会話をを行う。

ゼムリャとの通信の締めくくりに女性の声が出て、トラフキンはカーチャだと気付いた。彼女は彼に成功と早期の帰還を願っていた。

「私たちはあなた方を熱く抱きしめます」。興奮と彼の成功に対する誇りから震える声で彼女はこう結んだ。そして任務と直接関係のある何かを言ったような口ぶりで、尋ねた。

「分かりましたか？ (Поняли вы меня?) 分かりましたか？ (Как поняли вы меня?)」。

「分かりました (Я понял вас)」。彼は答えた。(C.61、第9章)

直接に相対している時には、お互いに発することが出来なかった言葉が無線では発せられる。「ズヴェズダ」と「ゼムリャ」の二つの遠く隔たった地点にいるトラフキンとカーチャは、無線通信によって繋がっている。

偵察隊のコールサイン「ズヴェズダ」と連絡本部の「ゼムリャ」が担っている意味についてA.ボチャロフは、以下のように書いている。

このように作者は少しずつ、普通のコールサインのシンボリックな意味を我々に明らかにする。我々全てにとって「星」という言葉は多くの意味を持っている。遠く、魅力的で、消えて、輝き、呼びかける——我々の気持ちや思考のイメージに依拠して。しかし小説の作者は「星」の二つの意味を繰り返す。それは明るく輝き、呼びかけるという意味である。明るい (*Яркий*)、というのは、自らの光でソビエト兵士の崇高なヒロイズムを照らし出し、人々の心に消えることのない灯をともし、呼びかける (*Зовущий*)、というのは偉功を繰り返そうという意欲を呼び起こし、人々の精神に刻印を残す。⁸

遠く本隊から離れて敵地で活動する「ズヴェズダ」の担う意味としては、このような意味づけもできる。しかし、単独の言葉としてではなく、具体的にトラフキンとカーチャとの関係から、コールサインの名称の意味を考えてみよう。

トラフキンは偵察隊を率いて「ズヴェズダ」となり、通信兵カーチャは志願を断られ、「ゼムリャ」に残る。「ズヴェズダ」と「ゼムリャ」は対になっている。その後の偵察隊の壊滅を踏まえると、「ズヴェズダ」と「ゼムリャ」は、そのまま「死」と「生」を担っている。トラフキンは「この世」と縁を切って「死」の世界に入っていく。それに対しカーチャは「ゼムリャ」＝「生」の側に残る。

遠く本隊から離れて敵地で活動する「ズヴェズダ」と彼らの帰還を待つ「ゼムリャ」は、文字通り「惑星間の、宇宙的な」隔たりがある。それを繋ぐのは無線機であり、電波が敵味方の境を越えて交信しあう。無線通信は「死」と「生」の別々の二つの世界をつなぐ「通

⁸ A. Бочаров. Эммануил Казакевич. Очерк творчества. М., 1965. С.26.

信」なのである。物語の終章では、カーチャは無線機からの声をひたすらに待ち望む。カーチャの行なう「ズヴェズダ」のコールサインの連呼は、トラフキンを代表とする戦死したものの達への「呼びかけ」の叫び、戦死して「この世」で再び見えることの出来なくなった人々に呼びかける叫びとなる。A.ボチャロフの言う「明るく輝き、呼びかける」星は、単体で輝いているのではない。ボチャロフが言うのとは逆に、それは地上で見上げる者がいて初めて、輝いて見えるものだ。

作中では「ズヴェズダ」からの通信を待ちわび、疲労したカーチャは幻を見る。幻の中では、もう会うことの無いであろう者たち、すなわちトラフキン、マモチキン、彼女の兄のレーニャが現れる。

カーチャは半ばまどろみつつ、一日中、耳に無線のレシーバーを当てていた。彼女には何だか奇妙な夢、幻が見えた。緑の迷彩服を着て、とても青い顔をしたトラフキン、二重に写るマモチキン、張り付いたような笑みを浮かべる彼女の兄のレーニャ、彼もなぜだか同じく迷彩服を着ていた。(C.77、第11章)

彼らは同じ迷彩服を着ている。カーチャが見た幻は、個々の兵士たちから、戦死者一般へと拡大できる。カーチャという存在は、戦死者一般を悼み、その偉功を承認する者となる。

Д. Данин の批評「トラフキンの運命」⁹ は、死者の成した、あるいは成し遂げられなかった仕事を生者が引き受けるという「連続性 (Преемственность)」に着目している。Д. Данин は小説の最初と最後で、前線への道を歩む偵察隊員と彼らに激励を送る師団長セルビチェンコとすれ違う場面が繰り返されていること、二つの場面は同様の表現を用いて繰り返されていることに注目している。最初では偵察隊の指揮官はトラフキン、最後では彼の部下であったメシチェルスキーとなっており、Д. Данин に拠れば、この反復に、帰還しなかった先行の偵察隊長マルチェンコの運命を重ねて、マルチェンコから、トラフキン、メシチェルスキーへと、三人の兵士の偵察隊員としての任務が継続されていることとなる。

しかし、カーチャは、この男性兵士に担わされた任務の「連続性 (Преемственность)」からは排除されている。彼女の偵察隊との同行を求める志願はトラフキンの冷たい拒絶にあう。男性であるトラフキンは、女性であるカーチャを「生」＝「ゼムリャ」の側に残す。「死」と「生」の二つの世界へ隔てられた二人の関係は、そのまま、男と女の兵士像の担わされる関係に他ならない。任務の「連続性 (Преемственность)」は男性によって担われ、女性兵士カーチャに対しては、その役割を担う女性の前任者と後任者はいないけれども、(マルチェンコ→トラフキン→メシチェルスキーの如く) 戦死した者たちを記憶に留め、想起を継続する役割が与えられる。

物語後半、最終的なドイツ軍集結状況の報告を最後に、「ズヴェズダ」からの連絡は途絶える。無線機の前で、コールサインを呼び続ける彼女は、自らの疑問を問い続ける。

⁹ Д. Данин. Судьба Травкина. Знамя.1947. №10. С.190-194.

無線での彼女の結びの言葉に対するトラフキンの返事は何を意味しているのか。彼はそもそも「了解した」と言ったのは、無線の受信を確認するためなのか、それとも彼は自分の言葉の中に何か秘密の意味を込めたのか？この考えが何よりも彼女を混乱させた。彼女には死の危険に囲まれた彼が、人間の率直な感情に対して寛大に、理解しやすくなったのだと、そして無線での最後の言葉はその変化の結果なのだと思われた。彼女は自分の考えが気に入った。軍医ウリイブィシェヴァにねだって、手鏡をもらい、自分の顔に——彼女はこの言葉を口に出しすらしした——英雄の花嫁にふさわしい、厳かで、真剣な表情を付け加えようと鏡を眺めていた。(C.76、第11章)

この「英雄の花嫁」という言葉が、一切を物語っている。任務に「死」を賭した新郎トラフキンに代表される男性兵士は、「生」の側に残った(残らせられた)新婦カーチャによって、勲功が認められ、存在が記憶に留められ、その死が追悼されるのである。

『星 Звезда』においては、女性兵士カーチャは、男性兵士トラフキンとの恋愛を通して彼の存在と偉功を移す鏡として現れ、「死」と「生」の両面の世界に隔てられることによって、勲功を承認し、その記憶を残す役割を担っている。本作品では女性兵士の役割はそのように描かれている。

8 おわりに

今回、『星 (Звезда)』のトラフキンとカーチャが担っていた役割は、その後のソビエト戦争作品で継続されていったのか、変化を被っているのか、それぞれの作家と作品の多様性に考慮しつつ考察することで、男性兵士と女性兵士の役割を通して「大祖国戦争」の記憶の文学的継承の特徴を追っていくことが可能であるかもしれない。

Gasiorowska は、雪解け後の戦争文学に登場する女性兵士像の変化に触れ、

全体として、戦争フィクションでの女性は目立たず、標準化されてしまった。可愛い「小さな看護婦」と狙撃兵、よく訓練されたインテリジェンスエージェントはまだいたところにおいて、軍はまだ彼女らに恋をしている。しかし、トレンドが変化しない限り、戦争フィクションにおける英雄的な女性兵士は絶滅に直面しているのである。¹⁰

と述べている。しかし戦争文学における女性像は、「英雄的な女性像」が「絶滅」しなかったばかりか、より大きく多様な存在となって戦争文学の中で生き続けた。

というのも自身の戦争体験を基にして小説を描く作家が大量に登場し、戦争文学というジャンルでは質、量ともに蓄積がなされていったからである。バクラーノフ、ボンダレフ、ブイコフといった戦争作品を自らの文学的主題の中心に据えた作家の他、テンドリャコーフやアスターフィエフといった作家も戦争を題材とした作品を描かずにはいられなかった。自ら戦争を担った世代による、自己の体験を点検する時間を経過した後での戦争小説の創

¹⁰ Gasiorowska, p. 169.

造が行われた。少年兵の戦争への恐怖をつづったオクジャワの『少年兵よ、達者で！（Будь здоров щколяр!）』での看護兵ニーナや В.ワシーリエフの『この朝焼けは静か（А зари здесь тихие...）』に登場する勇敢に戦い死んでゆく女性兵士たちなど、後年の戦争文学でも女性兵士というキャラクターは作品内で重要な役割を果たしている。

今回は、『星』のみを素材としたが、戦争の記憶とその表現のあり様、文学ジャンルとしての戦争文学全体の発展と変容を理解するためには、より多くの作家を対象にかつ通時的に分析することが望ましい。ソ連時代の文学遺産としての戦争文学は今、どのような意味を持つのか。同時代批評をふまえつつ、それとは異なる、現在ならではの視点を模索していくことが求められている。